

7. 甲殻類

【選定・評価方法の概要】

甲殻類の多くは海産で、7～8 万種と見積もられているが、その一部の種だけが岩礁、泥質の潟、砂質の浜、河口の汽水域から陸上湿地へと生活圏を広げている。

今回、評価対象とした甲殻類はワラジムシ目（等脚目）とエビ目（十脚目）に属す種である。ヨコエビ目（端脚目）の種も陸上に進出しているが、伊豆諸島、小笠原諸島のいずれにおいても調査がほとんど行われていないため、評価対象から外した。多くの種が記録されているワラジムシ目においても、実際にはそれぞれの種の分布や生息状況に関する情報はほとんどない。他地域に産する既知種の状況から判断する限り、このグループは種分化が著しく、それぞれの種の生息範囲は狭い可能性が高い。一般的には人間の活動の影響を受けやすい環境に多く、したがって指標性の観点から重要な存在ではあるが、小型種が多いことと分類が容易でないことから、特定の種をランク付けすることは難しい。ワラジムシ目は伊豆諸島から 33 種、小笠原諸島から 25 種が記録されているが、評価対象としたのは小笠原諸島産のオガサワラコツブムシのみである。

一方、大型甲殻類といわれる十脚目においては、陸域、淡水域に進出しているのは限られたグループで、伊豆諸島産としてエビ類 5 種、ヤドカリ類 2 種、カニ類 18 種が、小笠原諸島産としてエビ類 9 種、ヤドカリ類 5 種、カニ類 9 種が記録されている。これらの種の中から、それぞれの分布、生息状況から判断して、以下のように検討対象種を選定した。

エビ類では小笠原諸島産のヌマエビ科のミナミオニヌマエビとオガサワラヌマエビ、テナガエビ科のオガサワラコテナガエビの合計 3 種である。陸上に進出しているヤドカリ類はオカヤドカリ科に限定されるが、典型的なオカヤドカリ類は国の天然記念物に指定されているため、オカヤドカリ類 4 種を検討対象種とし、併せて同科のヤシガニも検討対象種とした（伊豆諸島産のオカヤドカリ 2 種は小笠原諸島にも分布している）。カニ類の検討対象種は、伊豆諸島産はオカガニ科 1 種とモクズガニ科（広義のイワガニ科）5 種、スナガニ科 1 種で、小笠原諸島産はイワガニ科 1 種、モクズガニ科（広義のイワガニ科）3 種、ベンケイガニ科（広義のイワガニ科）1 種、スナガニ科 1 種である。結果として、検討対象種として選定したのは伊豆諸島産 9 種、小笠原諸島産 15 種である。

小笠原諸島父島、母島での河川調査により得られた詳細な情報がある種に関しては定量要件により評価したが、その他多くの種の評価は定性要件によった。

【選定・評価結果の概要】

既存の文献記録、協力者からの聞き取り調査、一般から東京都に寄せられた情報、野外調査などの結果を総合して、検討対象種（伊豆諸島産 9 種、小笠原諸島産 15 種）の評価を行った。その結果、伊豆諸島産については、DD（情報不足）4 種、留意種 4 種、ランク外 1 種と判定された。小笠原諸島では、CR+EN（絶滅危惧Ⅰ類）3 種、VU（絶滅危惧Ⅱ類）2 種、NT（準絶滅危惧）1 種、DD（情報不足）3 種、留意種 4 種、ランク外 2 種と判定された。

上記の評価結果から、本州から遠距離に位置する海洋島である小笠原諸島の陸域、汽水域、淡水域に甲殻類の固有種が存在すること、また、河川環境が小さいことから種の存続が危機的状況にあることが追認された。一般論として、島しょの生態系は脆弱で、渇水など自然現象の結果あるいは生息地の人為的な改変や消失によって個体群は速やかに消失してしまう。広域に分布する通し回遊性の種であれば、伊豆、小笠原諸島がインド西太平洋海域の北限地であっても、生息環境が回復すれば幼生が補充される可能性はある。しかし、小笠原諸島のような孤立した小さな海洋島の、そして、その限られた環境にだけ生息する種については、生息環境が一旦失われると絶滅に至ることは確実である。

(武田 正倫)

甲殻類(島しょ部)

【記号凡例】

[EX]絶滅 [EW]野生絶滅 [CR+EN]絶滅危惧Ⅰ類 [VU]絶滅危惧Ⅱ類
[NT]準絶滅危惧 [DD]情報不足 [LP]絶滅のおそれのある地域個体群 [*]留意種

■伊豆諸島

和名	学名	東京都ランク (伊豆諸島)	環境省 ランク
エビ目(十脚目)	DECAPODA		
オカヤドカリ科	Coenobitidae		
ムラサキオカヤドカリ	<i>Coenobita purpureus</i>	*1	
ナキオカヤドカリ	<i>Coenobita rugosus</i>	DD	
オカガニ科	Gecarcinidae		
ヒメオカガニ	<i>Epigrapsus notatus</i>	DD	NT
モクズガニ科	Varunidae		
ヒメイワガニモドキ	<i>Pseudograpsus albus</i>	*2	
ケフサヒライソモドキ	<i>Ptychognathus barbatus</i>	DD	
ハチジョウヒライソモドキ	<i>Ptychognathus hachijyoensis</i>	*3	DD
ヨツハヒライソモドキ	<i>Ptychognathus takahashii</i>	DD	NT
スナガニ科	Ocypodidae		
ミナミスナガニ	<i>Ocypode cordimana</i>	*4	

和名は三宅貞祥, 1982・1983. 原色日本大型甲殻類図鑑Ⅰ・Ⅱ. 保育社.、学名はNg, P.K.L., D. Guinot & P.J.F. Davie, 2008. Systema Brachyurorum: Part I. An Annotated Checklist of Extant Brachyuran Crabs of the World. Raffles Bull. Zool., Suppl. (17), 286 pp.に準拠した。また、配列は評価者の判断に従った。

【留意種とした理由】

	和名	留意種とした理由
*1	ムラサキオカヤドカリ	オカヤドカリ類についての経時的な生息調査は行われていないため、個体数の増減については判断できないが、オカヤドカリ類は天然記念物に指定されており、海から陸へと進出を始めた特異な生態をもつ。海と陸を隔てる人工構造物はオカヤドカリ類の移動分散の妨げになる可能性があり、留意が必要である。
*2	ヒメイワガニモドキ	両種とも地下水が浸み出した海岸の転石帯に生息しているが、このような環境は港湾工事などの影響を受ける可能性が高い。海岸の埋め立てや地下水の供給が断たれると、いっせに個体数が減少してしまうことが懸念されるため、留意が必要である。
*3	ハチジョウヒライソモドキ	また、ハチジョウヒライソモドキは近年琉球列島からも見つかっているが、八丈島がタイプ産地であるため同島の個体群は分類学的にも重要な意味を含んでいる。
*4	ミナミスナガニ	夜間に砂浜で活動する種である。島しょ部では本種が生息できる海浜は少なく、さらに人間活動の影響を受けやすい場所であることから、環境指標として個体数の増減に留意する必要がある。

■小笠原諸島

和名	学名	東京都ランク (小笠原諸島)	環境省 ランク
ワラジムシ目(等脚目)	ISOPODA		
コツブムシ科	Sphaeromatidae		
オガサワラコツブムシ	<i>Gnorimosphaeroma boninense</i>	CR+EN	CR+EN
エビ目(十脚目)	DECAPODA		
テナガエビ科	Palaemonidae		
オガサワラコテナガエビ	<i>Palaemon ogasawaraensis</i>	VU	NT
ヌマエビ科	Atyidae		
ミナミオニヌマエビ	<i>Atyoida pilipes</i>	NT	NT
オガサワラヌマエビ	<i>Paratya boninensis</i>	CR+EN	CR+EN
オカヤドリカリ科	Coenobitidae		
ヤシガニ	<i>Birgus latro</i>	DD	VU
オカヤドカリ	<i>Coenobita cavipes</i>	*1	
サキシマオカヤドカリ	<i>Coenobita perlatus</i>	DD	VU
ムラサキオカヤドカリ	<i>Coenobita purpureus</i>	*1	
ナキオカヤドカリ	<i>Coenobita rugosus</i>	*1	
イワガニ科	Grapsidae		
カクレイワガニ	<i>Geograpsus grayi</i>	DD	
モクズガニ科	Varunidae		
オガサワラモクズガニ	<i>Eriocheir ogasawaraensis</i>	VU	VU
ベンケイガニ科	Sesarmidae		
クロベンケイガニ	<i>Chiromantes dehaani</i>	*2	
スナガニ科	Ocypodidae		
ベニシオマネキ	<i>Uca crassipes</i>	CR+EN	

和名は三宅貞祥, 1982・1983. 原色日本大型甲殻類図鑑 I・II. 保育社.、学名はNg, P.K.L., D. Guinot & P.J.F. Davie, 2008. Systema Brachyurorum: Part I. An Annotated Checklist of Extant Brachyuran Crabs of the World. Raffles Bull. Zool., Suppl. (17), 286 pp.に準拠した。また、配列は評価者の判断に従った。

【留意種とした理由】

	和名	留意種とした理由
*1	オカヤドカリ	オカヤドカリ類の生息調査は近年行われていないため、個体数の増減については判断できないが、オカヤドカリ類は天然記念物に指定されており、海から陸へと進出を始めた特異な生態をもつ。海と陸を隔てる人工構築物はオカヤドカリ類の移動分散の妨げになる可能性があり、留意が必要である。
	ムラサキオカヤドカリ	
	ナキオカヤドカリ	
*2	クロベンケイガニ	本種が生息する河口域は、河口閉塞や水質汚染、人工構築物の影響を直接受けることから、本種は良好な環境の指標となる。 また、父島の八瀬川水系では、標高60m付近の淡水域まで大型個体が分布している。このような例は本土からは報告されておらず、小笠原諸島の個体群が特殊であると考えられる。